

MiYAGi

まちづくりと 地域支え合い



商店でお茶飲みをする人たちの話を聞く気仙沼市の地域支え合い推進員、藤村由喜さん

CONTENTS

2-3 「まちづくりの今」⑦ 気仙沼市

地域のつながりが支え合い育む

藤村由喜さん（気仙沼市地域支え合い推進員）

4-5 「まちづくりの今・県外編」 山形県朝日町

必要な資源は「サービス」だけではない

小関典子さん（朝日町生活支援コーディネーター）

6 県外アンテナ

岡山発 常設拠点とボランティアセンター機能で支え合いを活性化

7 読んで押さえる講義のツボ

すでにある協議の場に関わる

岩城和志さん（淡路市社会福祉協議会事務局次長）

8 2019年度 宮城県生活支援コーディネーター養成研修 対象者限定3 開催報告

宮城県内外の

生活支援コーディネーターおよび協議体の

取り組みを発信しながら、

住民や専門職・関係機関の意識を高め、

最後まで住み慣れた地域で暮らし続ける

社会づくりを目指します。

vol.25
2019.11

気仙沼市

【けせんぬまし】人口6万2781人(2万6395世帯)、高齢化率37.7%(2019年9月末時点)。生活支援コーディネーターの配置は市社会福祉協議会が実施。名称は「地域支え合い推進員」で第1層1人、第2層10人。第2層圏域は地区社協単位の16地区で、推進員1人が1~3地区を担当する。推進員と地区のつなぎ役として住民のなかから「地域支え合い協力員」を選任。協力員は現在12人で、将来は各地区2人ずつの計32人体制とする計画。

地域のつながりが 支え合い育む

藤村由喜さん



藤村由喜さん(市社協内の事務所で)

鮮魚店が支え合いの拠点に

「最初にその話を聞いたとき、地域のお宝だという確信はありませんでした」

こう話すのは、気仙沼市の第2層地域支え合い推進員の藤村由喜さん。

地域のお宝は、介護予防や見守り、支え合いなどに役立つ集いの場、近所付き合い、生活文化などのこと。

その話とは、小さな店にいつも人が集まっているという、ある民生・児童委員からの情報。

「店に人(客)が来るのは当たり前。でも何かあると思って、行ってみることにしました」

2019年1月半ば、藤村さんは民生・児童委員とともに西城鮮魚店(次頁囲み記事)を訪れる。

たまたま客足が途切れていて人が集う様子は見られなかったが、店主・西城喜久子さん(76歳)とはじっくり話をすることができた。

「西城さんは『この店は私の生きがい』と言ったんです。その一言にピンとききました。ものを売り買いするだけの場ではないな、と」

藤村さんは何度も店に通い、西城さん、買い物客、お茶飲みが集う人びとを取材。すると、驚くべき支え合いの実態が浮かび上がった。

店では、毎日20人ほどの高齢者が入れ替わり立ち替わりお茶飲みを楽しむ。ゆっくり過ごしたい人は、店が忙しくない時間帯を選んで来る。誰が何

時頃来て買い物をするか、お茶飲みをするか、だいたい決まっている。午前だけの人、午後だけの人、午前・午後両方来る人、1日おきに来る人もいる。姿を見せない人がいると、西城さんと常連たちが連携し、電話を掛けたり家を訪ねることもある。

認知機能の低下した人が店の前を通りかかると、西城さんや常連たちが「お茶を飲もう」と声を掛ける。ひとしきりお茶飲みを楽しんだら、誰かが「そろそろ家に帰ろう。一緒に歩いて行こう」と帰宅を促す。場合によっては家族に連絡を入れる。

やや歩行の不自由な一人暮らしの高齢男性が、杖をつけて店にやって来る。男性は炊飯はできるが、料理は苦手。毎日のおかずは西城さんの手づくり惣菜が頼りだ。西城さんは栄養が偏らないようメニューを工夫、価格もできるだけ安く抑える。

客から要望があれば、水産物や惣菜以外にも青果類、パン・菓子類、カップ麺、缶詰・レトルト食品、日用雑貨など、仕入れ可能なものは何でも店に置く。

売り場の一部は、常連たちの自慢の工芸作品や草花の展示スペースとして開放。展示用の棚は、木工の得意な近所の男性陣が製作した。

店は売り場と調理場を合わせて十坪ほどの規模。西城さんの夫が50年近く前に創業した。夫は13年前に亡くなり、西城さんが店を受け継ぐ。それまで鮮魚専門だったのを、仕出しや惣菜なども手がけるようにした。客筋が



わがまちのお宝紹介

【踏切手前のお茶処】気仙沼市太田地区を通るJR大船渡線（現在はBRT＝バス高速輸送システム）の踏切近くにある「西城鮮魚店」。十坪ほどの店内にはイスとテーブル

が置かれ、常連たちが入れ替わり立ち替わりお茶飲みを楽しむ。店は西城喜久子さん（76歳）が1人で切り盛り。客の要望に応じて水産物以外の食品や日用雑貨などを品揃えするほか、独居の男性高齢者らのために栄養バランスの取れた手づくり惣菜も提供。地区の高齢者にとって、生活と健康の大きな支えとなっている。

「店は地元の高齢者にとって貴重な地域資源。西城さんも『皆が店に来て

実は地区全体がお宝だった

広がり、西城さんの温かな人柄を慕って、店でお茶飲みをする人も増えていった。
店がある太田地区は、気仙沼湾を見下ろす安波山あんばさんの山裾に位置する住宅街。高台のため震災時の津波被害は一部を除いて免れた。店も難を逃れたが、西城さんは廃業を考えた。客の要望や家族の励ましを受けて気を取り直し、継続することにしたという。

くれるのが私の生きがい」と言います。相互にお宝的な関係なんです」

地区には独居や日中独居状態の高齢者が少なくない。車などの移動手段を持たない人もいる。生活必需品の購入を友人知人や若い家族に依頼できる場合でも、西城鮮魚店で入手できるものはあえて頼まない。

「皆さん店に行く機会を減らしたくないし、店が少しでも長く維持されるよう、売り上げに貢献したいんです」

西城さんと同居する息子夫婦もこうしたお宝的相互関係を理解、店の運営をあと押ししている。

認知機能の低下した人の見守りに関しては「店に集う人たちに限らず、実は地区全体で行っていることがわかりました。皆さんそれとなく様子を見て、声をかけたりしています。店は一種の閱所で、そこより先に行く町場に出て道に迷う可能性が高い。だから特に気をつけて見えています。その人の家族は日中勤めに出ていますが、地区の民生・児童委員は『みんなで見てるから大丈夫。安心して出かけて』と言ってあげています」

店を手がかりに地区全体の住民同士つながりが、お宝の基盤として見えてきた。

「地区で培われてきた住民相互の信頼と関係性が、お宝的な居場所や自然な見守りを育む土壌と言えます」

こうした情報や認識の共有は、さまざまなレベルで行われている。

市社協は月に一度、生活支援体制整備の定例会議を開く。地域支え合い推

進員をはじめ、体制整備を所管する市地域包括ケア推進課の職員、さらに県議事事務局（県社協）スタッフも参加。情報を共有しつつ、体制整備の方向性を検討、確認している。

住民向けには「社協だより」（年6回発行、全戸配付）にお宝紹介コーナーを設け、情報を発信。また、16ある地区社協単位で年1回程度開催する地区住民懇談会でもお宝の周知を図る。懇談会は地区社協が主催するもので、第2層協議体と位置付けられている。体制整備の説明やお宝紹介、地区のお宝発掘のグループワークのほか、自分たちが理想とする地域像や地域の課題についての話し合いを行う場



西城鮮魚店のお茶飲み場で談笑（左端が藤村さん、中央が店主・西城喜久子さん）

合もある。

第1層協議体は、市社協を含む保健・医療・介護・福祉の関係機関や商工業団体、郵便、警察、消防、市など75団体で構成する市地域包括ケア推進協議会の「コミュニティ・生活支援専門部会」（事務局：市地域包括ケア推進課）がその機能を担い、年1、2回会合を開く。今年8月21日の同部会は、県生活支援コーディネーター養成研修（実践講座1・3気仙沼会場）への参加という形で実施した。この研修は、気仙沼・南三陸地域のお宝発表会とその運営方法について学ぶ内容で、藤村さんが西城鮮魚店を「踏切手前のお茶処」として紹介。店主と常連4人も登壇した。発表会には一般市民も多数来場、計150人あまりがお宝当事者の生の声と姿に接した。

「一連の取り組みで、地域づくりに

ついて考えるきっかけを広く提供できました。推進員の役割についても周知が進んでいます。今後も地区住民懇談会などを通じて、お宝への理解を促したいと思います」

藤村さんは気仙沼市出身、在住の60歳。1986年に市社協に入職、以来一貫して福祉・介護畑を歩んできた。モットーは「遊びから始める」。趣味も仕事も遊びや笑い、楽しさが継続・発展に不可欠という。これらの要素は、お宝には自然に備わっている。遊び心を忘れない姿勢は、お宝を生かす地域づくりにもきっと役立つはずだ。

利

朝日町

【あさひまち】山形県中央部の中山間地に位置。人口6762人(2407世帯)、高齢化率42.5%(2019年10月1日時点)。町域は1中学校区、3小学校区、55行政区で構成。生活支援体制整備事業では第1層を日常生活圏域とするが、地域特性は行政区によって差異があり、体制整備の諸活動もこれを踏まえて行っている。生活支援コーディネーターは、町社会福祉協議会が1人を専任配置(週2回勤務)。協議体は、町と町社協が共同事務局体制を敷く。

必要な資源は「サービス」だけではない

小関典子さん



小関典子さん(広報紙「おたがいさま」を掲げて)

協議体の全員が地域を取材

「高齢でも一人暮らしになって、自宅で暮らし続けるのに必要なのは、介護・福祉のサービスだけではないようです」

山形県朝日町の生活支援コーディネーター、小関典子さんはそう考える。

「一番大事なのは、近隣の住民同士の関係だと思えます。この町の多くの住民が、とてもきめ細やかな見守りや支え合いを、近所付き合いのなかで自然に行っているんです」

支え合いと、その背景にある良好な関係を育むさまざまな住民活動を「地域の宝」と呼ぶ。その称揚・奨励を「支え合いの地域づくり」として生活支援体制整備の柱に据えている。

「支え合いはあまりにも普通の、当然の行為として行われ、高齢者の暮らしに欠かせない資源とは特に意識されません。だからこそ意識化を促し、その価値に気づいてもらいたい。それが地域の宝を守ることにつながります」

同町でも都市化が進む中心市街地では、良好な関係の表れでもあるお茶飲みやおすそ分けといった生活文化が失われつつあるという。

地域の宝を意識化し、守り、広め、受け継いでいってもらう方策として、専用の広報紙の発行、行政区単位の住民向け研修・説明会と全町レベルでの支え合い発表イベントの開催などに取り組む。いずれも小関さんを軸に、町

と町社会福祉協議会を含む協議体の構成員が関与する体制を敷く。

広報紙は「おたがいさま」と題するA3版両面フルカラー二つ折り形式。2018年5月に創刊した。年4回発行で全戸配付する。

記事は事例紹介が中心。高齢者を取り巻く支え合いをはじめ、自宅・商店・集会所でのお茶飲み、道ばたやバス待合所での井戸端会議、飲食店で定期的に関く親睦会、祭りや講などの伝統行事、草刈りや水路清掃といった地区の共同作業とその後の慰労会、各種サークル、介護予防・交流サロン、さらには子どもたちが地域住民から和太鼓を教わる総合学習など、多岐にわたる。

「記事になった人たちからは、感謝の電話や手紙をたくさんいただきました。また、多くの住民から『これも取り上げて』と取材依頼が寄せられています」

高齢の母を一人残して別の町に暮らす娘が、帰省したとき偶然広報紙を手に取り、記事の一つに母の姿を見つけた。集いの場と支え合いのなかで楽しげに過ごす様子を知り「安心した」との声も。

記事のネタ集めと取材は、協議体の全員で行う。

構成員は、長寿クラブ(老人クラブ)、シルバー人材センター、ボランティア団体、サロン活動団体などの幹部、民生・児童委員、地域福祉に関心のある住民、介護事業所の職員、町健



わがまちの お宝紹介

【大船木の元気高齢者】長岡文子さん(84歳)は山間の小集落・大船木地区(17世帯35人、高齢化率63%)で一人暮らし。健康、活発で車の運転も問題ない。「皆の役に立ちたい」と移動手段のない人の買いものや通院を助け、町場で催しがあれば「一緒に行こう」と誘う。お茶飲みやおすそ分けはしょっちゅう。もらった野菜を調理してお返しに行けば、そこで食事に招かれたり。支え合って元気に暮らすお手本のような女性だ。

一方、外部専門家によるものは、地区研修会と銘打った単独プログラムと、住民参加を募る。ともに体制整備の制度的な解説はほとんどなく、地域の宝とこれを生かす地域づくりの話が中心。80〜90歳代も無理なく加わり、グループワークは大いに盛り上がる。参加者は地区の宝について話し合い、身の回りの自然な集いの場や支え合いに気づいていく。

サービス創出を目指すも…

「研修や取材では、住民の皆さんは自分たちの宝について、とても熱心に語ってくれるようになりました」

ごく普通の日常が、地域の宝と評価される驚きと感動。高齢でも自宅元気に過ごす、その暮らしぶりへの憧れと共感。それらが着実に広がりつつある。

来年3月には町役場隣接の開発センターを会場に、支え合いの発表イベントを初開催する。100人以上の来場が見込まれ、地域づくりの機運醸成に弾みがつくと期待される。

小関さんがコーディネーターとしての活動を開始したのは2016年8月。当時は、新たな生活支援サービスの立ち上げを目指していた。地域の生活課題と既存資源(介護予防教室、各種事業系サービスなど)を抽出、整理し、必要と思われるサービスとして家事支援、居場所(サロン)提供、外出・移動支援、配食、安否確認・見守り、除雪などを列挙。その立ち上げに向けた検討を協議体で諮った。ところが、

が、同年度中の4回にわたる会合は足踏み状態が続いた。

「構成員の反応は薄く、積極的な発言を引き出せませんでした」

ただ、毎回次のようなつぶやきが漏れた――「『おたがいさま』でできるよね」

これをヒントに2017年1月、5回目の協議体で、暮らしのなかの支え合いを掘り起こすグループワークを試みる。そこで「困りごとを抱えたり体調の悪い人が近所にいれば、私たちは自然体で手を差し伸べられる」との結論を得た。

半年後、小関さんは高齢化率が6割を超える山間の小集落・大船木地区を訪れる。改めて地域の生活課題を探ろうと、当時82歳で一人暮らしの長岡文子さん(現在84歳※囲み記事)にインタビューした。

「すごく困ってるだろう、課題だけだだろうと思ってました。買いたいものとか、通院とか、体調が悪いときの食事とか。でもそれは、地区の暮らしを知らない人間の、上から目線の勝手な思い込みでした」

地区の住民関係は親密で、近隣の困りごとや体調不良にはすぐに気づき、必ず誰かが手を差し伸べる。車を持っている人は、移動手段のない人の買いものや通院のほか、娯楽を目的とした外出も手伝っていた。お茶飲みとおすそ分けの生活文化が色濃く残り、一人暮らしでも決して孤立することがない。長岡さんら地区の高齢者は一方的

に支えられるだけでなく、支える側でもあった。誰かの役に立つことが、生きがいになっていた。

「このとき確信しました。住民同士の関係と支え合いこそ重要だと。それを差し置いてサービスづくりを進めてはいけません。将来的に一定のサービス創出は必要としても、現時点では、いまできていることを自信を持って続けていけるようにすべきです」

小関さんは朝日町出身、在住の66歳。役場職員として長年、教育行政や保健福祉などの分野に携わり、退職後は介護施設の運営支援にも関わった。趣味は茶道。司書の資格を持ち、文芸同人誌の編集人も務める。「その場その時に流されて生きてきた」と笑うが、状況を的確に見極め、対応する鋭い感性と柔軟さ、行動力を併せ持つ。その持ち味を地域づくりにも存分に発揮している。



社協の事務所で地域づくり説明会の打ち合わせをする小関さん

利

常設拠点とボランティアセンター機能で 支え合いを活性化

岡山県内では、市町村社会福祉協議会に所属する生活支援コーディネーターと岡山県社会福祉協議会が自主的な情報交換会を年5回行っており、8月22日に行われた第2回目では、玉野市の2つの地区社協を視察した。岡山県社協は、地域の助け合い・支え合いの活性化を目指し、地区社協圏域での、住民運営による地区ボランティアセンター構想を推進しており、玉野市でも11地区のうち3地区で運営されている。実際の取り組みを紹介する。



一軒家を活用した玉原地区ボラセン



通りに面したビル1階にある和田地区ボラセン

地区ボランティアセンター構想は、常設の拠点を設けて、「生活のちょっとしたお手伝い」をするサポーターと利用者との調整を担うもの。拠点はカフェ・サロン活動の場でもあり、週1〜2回の開所日にはコーディネーター役の住民が常駐する。初年度のみ設立費用として50万円、ボラセン活動費として月2万円（加算あり。年間最大で30万円）の助成が玉野市から出るほか、カフェの運営母体となる地区社協へ市社協が活動助成金を出している。

玉野市内で第1号となる地区ボラセンを2018年6月に開設した和田地区社協は、第2次地区福祉活動計画を策定・遂行中の活発な地区だ。いきいきサロンを週1回開くとともに、最初の1年間で、庭の草抜き・買い物代行・ゴミ出し・簡単な掃除など400件に対応した。利用者は、70〜80歳代の単身世帯・夫婦世帯が中心。利用料金は10分100円のチケット制で、半額がサポーターに支払われる。2人

のコーディネーターが、電話で相談を受けたあと、事前に利用希望者宅を訪問して状況を丁寧に聞き取り、サポーターを調整して派遣する。コーディネーターが長年地域で活動してきた経験と人脈を活かし、楽しんで取り組んでいるのが印象的だ。

コミュニティ協議会による移動支援

などが行われていた玉原地区では、え合い活動の意義について1年間話し合い、地区社協を2018年9月に設立。「地域に居場所がほしい」「飲食できたほうが人が集まる」という意見から、昭和時代に建てられた戸建ての市営住宅を活用し、地区ボラセン開設と同時に、喫茶やランチを提供する常設拠点「カフェつどい」を2018年12月にオープン。カフェでの何気ない雑談から、独居高齢者の体調の異変に気づいたり、認知症の相談を受けて地域包括支援センターにつなぐなど、地域の情報をいち早くキャッチして対応できるようになったという。

どちらの地区のコーディネーターも、「相手の話をじっくりと聞くことが大事」と話す。利用者が便利屋代わりに自分で行うことまで依頼してきたときは、丁寧に説明して断ることも。また、利用者の困りごとに対応するだけでなく、趣味・嗜好の合うサポーターを調整・派遣することで、地域での新たな人間関係づくりにも貢献している。

市社協の生活支援コーディネーターは、地区社協の取り組みを下支えしながら、これらの活動を地区内外に発信して、地域のつながりと支え合いを推進している。



読んで押さえる講義のツボ



すでにある協議の場に関わる

岩城和志さん

(兵庫県淡路市社会福祉協議会事務局次長、淡路市第1層生活支援コーディネーター)

宮城県生活支援コーディネーター養成研修の【生活支援コーディネーター基礎・実践研修】で使用する「生活支援コーディネーター養成テキスト」81ページに次のような記述がある——協議体の複数の目的に応じて、それぞれの協議の場を、第1層の協議体群、第2層の協議体群というような「かたまり」としてとらえたほうが実質的かつ機能的です——。その実践例を淡路市社会福祉協議会に見ることができる。今年8月2日、仙台市で開かれた養成研修の【地域福祉コーディネーター基礎・実践研修受講のための事前研修】に、市社協事務局次長で第1層生活支援コーディネーターの岩城和志さんが登壇。協議体群についても言及した(以下、発言要旨)



協議体の運営で困っているという声をよく聞くが、一つの協議体だけで事を進めようとするのが、困った協議体を生み出す要因だということに目を向けてはどうか。

地域で生活課題を検討して新しいサービスの立ち上げを目指すとしても、一つの協議の場だけでそれを目指すことに無理があることは誰もがわかっていることだ。

実際に地域づくりで活躍している町内会長、民生・児童委員、地域の世話役らはいろんな会合に出て、意見や要望、アイデアなどを聞き、調整する。それらの協議の場は、すべて事実上の協議体だ。協議体は生活支援体制整備が始まる以前から、実はたくさんあった。

そのように捉えるならば、生活支援コーディネーターは協議体をつくるより、すでにある協議の場に関わらせてもらうことが重要。ただ、新しい協議の場づくりを否定するわけではないことを申し添えておく。

地域づくりの新たな動きは、生活支援コーディネーターがいろんなところに関わる

ことで、ようやく生み出せるものだと思う。

コーディネーターの役割の一つは、人と人とが会う場を生み出すこと。たとえばあるグループの会合に出て「あそこの話し合いでこんな話題が出ていた」と情報提供する。すると「どんな人が参加しているの」「誰それです」「一回参加してみたい、誰それに会いたい」「それなら私が仲立ちします」となる。新しいアイデアや活動を生むきっかけは、主体同士の出会いから始まる。それこそが「協議の場」だ。

淡路市では、市域の第1層から旧町域5地区の第2層、小学校区の第3層、町内会域の第4層までいろんな協議の場がある。コミュニティカフェや女子会的な集まりだって協議の場。3人集まれば協議体、というぐらいの認識で構わないと考えている。

第1層では、生活支援コーディネーター会議、保健師・生活支援コーディネーター協働会議、福祉活動専門員会議、各種の介護事業所連絡会議、ボランティア連絡会、認知症SOS会議、そのほか市全体に関わる会合を協議体群としている。

市から市社協への体制整備の委託要項に、「協議の場」づくりはあっても、協議体を設立する項目はない。市も協議体群の考え方を理解してくれている。



【地域福祉コーディネーター基礎・実践研修受講のための事前研修】仙台会場で講義する岩城さん(2019年8月2日、エスポール宮城)

「実践へのヒントを得る」

——生活支援コーディネーターフォローアップ研修を開催



2019年9月27日、仙台市内で、「宮城県生活支援コーディネーター養成研修『対象者限定3』」の「生活支援コーディネーター（地域支え合い推進員）フォローアップ研修」が開かれました。生活支援コーディネーターを務める市町村社会福祉協議会や地域包括支援センターの職員ら27人が参加しました。講座のねらいは、コーディネーターが日頃の実践を振り返り、共有して、今後の実践へのヒントと活力を得ることです。

5つのグループに分かれ、個人ワークやグループディスカッション、発表を行うなかで、日常の業務を分析し、相手の意見を聞き、気づきを得ていました。その中身を一部抜粋してご紹介します。

コーディネーターの仕事をしてよかったこと

地域とのつながり

- 住民が温かく受け入れて、訪問をよるこんでくれる。
- 地域のすばらしさ、お宝を知った。
- 地域の知らなかった面を教えてもらえ、行事などを体験させてもらえる。
- 一つの集まりに行くと、別の集まりの情報が得られる。
- 地域のことに興味関心の高い住民が多い。地域の協力がある。

周囲の理解・協力

- 組織内の理解がある。上司、先輩が快く地域に送り出してくれる。
- 同じ局内、市町村内にコーディネーターの仲間がいる。悩みや楽しさを共有できている。
- 他機関の協力がある。
- 委託元である行政の担当者が一緒に楽しんでくれる。

個性と強み

- 外に出て、人と話すことが好き。性に合う。
- 住民のよろこびが自分のよろこび。
- 個別支援でのかかわりをコーディネーター業務に活かしている。

なぜうまくいっているのか、楽しいのか

- 地域に出て、住民と多く接することで、つながりが生まれる。時間、回数、年数でつながりの濃さは変わる。
- 初対面で、かえってしづらみなく話せて、そこから信頼関係を築ける。
- もともとその地域の人、暮らしぶりをよく知っている。
- 地域の集まりに足しげく通い、顔を覚えてもらえたことで、その場に出なくても情報が入るようになった。
- 社協所属の場合は、老人クラブや民協など既存の地域団体から情報を得て共有できる仕組みがある。

- 広報紙に職員の顔写真を載せたり、職員に地域に同行してもらって、地域と職場の人の距離が近づき、自分の仕事をわかってもらえる。
- 生活支援体制整備事業の目標やお宝の写真を事務所の掲示板に貼って、「見える化」し、共有できている。
- 職場内や委託元の行政、他機関との打ち合わせを、必ず顔をあわせてまめに行っている。

- 好き、楽しいという気持ちは相手に伝わる。
- 自分のキャラクター、所属する組織の強みをしっかりと分析できている。それを心がけてかかわりをもっている。

コーディネーターの仕事でやりたいけれどまだ進んでいないこと

業務が多忙

- 兼任で業務量が多い。個別支援に携わる時間が多く、コーディネーター業務に時間を割けない。
- 一人では担いきれない。

事業の成果

- ゴールが決まっていないため、方向性で迷う。
- 目先の実績や成果に振り回される。
- 求められる成果と実情があわない。

地域との関係性

- 住民のモチベーション、関心の差。
- 地域課題が多く、何から手をつけたいかわからない。

周囲の協力体制

- 地域のお宝訪問などのコーディネーター業務を理解してもらえない。
- 職場内の連携・理解不足。
- 関係機関の協力が十分ではない。

事業の理解

- 事業を伝えるのが難しい。周知が進まない。
- 協議体が進まない。

なぜうまくいかないのか、進まないのか いい方向に展開するにはどうすればいいのか

- 業務の割り振り、計画づくりを意識的にやって、優先順位をつける。
- 忙しい時でも職場でコミュニケーションをとって、助けられ上手に。

- 何が求められているか把握できていない。行政の求める情報がわかるシートを作成する。ケア会議・協議体で出た内容を要望書として行政に提出して、指標にする。
- 説明や報告の仕方を工夫する。費用対効果を上手に伝える。
- コーディネーターが外に出るときに、行政の担当者にも同行してもらう。

- 地域と顔の見える関係を築けていない。職場を巻き込んで、地域に出る回数を増やす。
- 住民から課題があがった時は、こちらで担うことと、住民が担うことに分けて助言する。他地区での解決例を提示する。

- コーディネーター業務を理解してもらうために、同僚や上司と一緒に地域に出てもらったり、コーディネーター養成研修を受講してもらう。
- 相手に伝え切れていない。伝わるような表現、ツールを駆使する。わかってもう一度繰り返す。

- キャッチフレーズなど、一言で伝える文言を考える。また、見て感じてもらうのが一番理解してもらえるので、お宝発表会を開催する。
- 地域の実情によって、目指すものが異なる。それを把握するために足しげく地域に通う。